

最上地方でもサクランボ

大雪による枝折れや5月の開花期に天候不順が多いことなどから、サクランボの栽培に不向きだとされてきた最上地方で、産地化に向けた試みが始まった。県は今年、「最上さくらんぼブランド確立プロジェクト推進会議」を設立。営農指導などを通じ、既存農家で採算をとれるようにし、その後、新規参入者を増やしていく考えだ。



金山町のサクランボ農家を視察する
多田社長(左から2人目)(12日)

「寒暖差」に注目 農家ら、販路拡大に意欲

県によると、サクランボを生産する農家は県内で約1万戸。約8割が村山地方で、最上地方はわずか60戸ほどだ。

原因は、開花期の天候不順により出荷時期が遅れ、値崩れのリスクを伴うこと。大雪による枝折れなどもあり、今まで安定して生産できなかった。それでも、県の担当者は「出荷時期が遅れても1週間程度。値崩れしても十分採算がとれる」と説明。鮭川村川口でサクランボを栽培する高橋淳さん(44)は「村山地方より寒暖差が激しい最上地方なら、もっと甘くておいしいサクランボが作れる」と意気込む。

今年27日、新庄市の県最上総合支庁産地研究室で、農業大学校(新庄市)や生産者らが参加する「さくらんぼ栽培研修会」が開かれた。

同支庁農業技術普及課の担当者が、新庄市や金山町などを試験場として進めている栽培の実験成果を発表。「サクランボの開花期

に低温降雨が重なり、結実がうまくいかない」という最上地方の条件を克服するため、ビニールなど被覆資材を使用した実証実験で結実できることを示してみせた。

村山地方の生産者も最上地方の魅力に注目している。山辺町で約2・1畝のサクランボを栽培する農業生産法人「多田農園」は、金山町への進出を検討している。

同農園の多田耕太郎社長(60)は今年中旬、同町のサ

クランボ農家を訪れた。この農家は「金山で栽培するなら、雪かきなど、冬もかかりきりだ」と環境の違いを説明。多田社長は真剣に耳を傾けていた。

同農園は2009年に法人化して以来、インターネッットやチラシを活用し、全国に販路を拡大。中国への

販売も検討している。多田社長は「ややお荷時期が遅れるが、寒暖の差を十分に取れるなど栽培環境は充実している。村山地方と差別化することで、最上のサクランボを全国に誇るブランドとして確立できる」と自信を見せた。